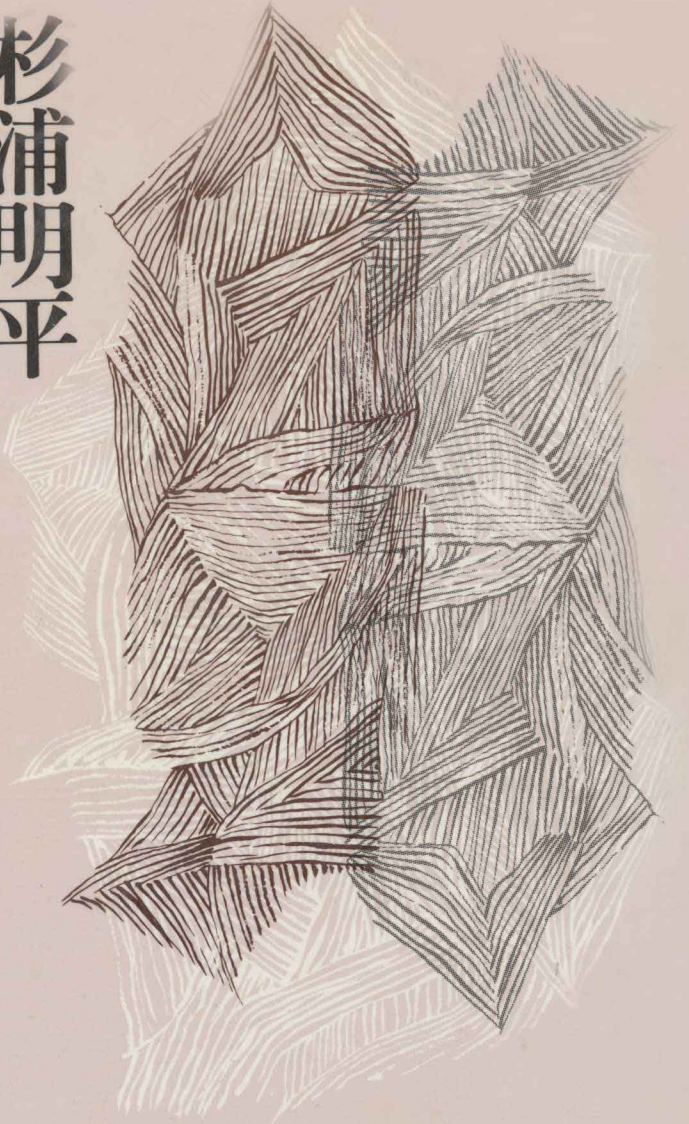


杉浦明平  
記録文学ノート



記録文学ノート

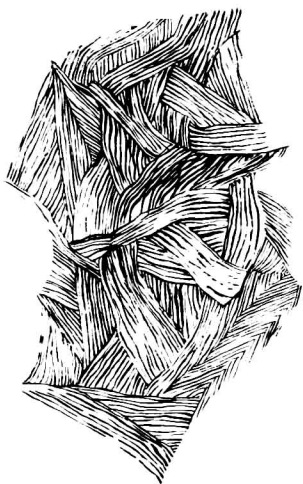
---

発行 1979年2月24日発行  
著者 杉浦明平  
発行者 武内辰郎  
発行所 (株)オリジン出版センター  
東京都新宿区神楽坂5-61  
電話03-269-0481・260-0453  
振替東京0・44705  
印刷 (有)三秀社  
装幀 熊谷博人  
定価 1400円

---

落丁本・乱丁本はお取替します。

杉浦明平



記録文学ノート

オリジン出版センター

此为试读, 需要完整PDF请访问: [www.ertongbook.com](http://www.ertongbook.com)



目次  
記録文学  
ノ  
ト

## I

庶民資料と新しい記録文学……………

9

—— 記録文学発掘の視座

対談・生きること、記録する心……………

21

—— たたかいの中でとらえた人間と生活

対談・記録文学の世界……………

37

—— 民衆の発想と多元的な視点

## II

記録文学の伝統と現代における問題点……………

89

記録主義の精神……………

157

ノン・フィクションと現代

180

### III

地方での文学運動

.....

189

かたりつぎ書きつぐことによつて

.....

195

生活と歴史の掘りかえし

.....

209

鼎談 識字・記録文学

.....

222

1 事実語ることに

.....

222

2 肩ひじはらず、かざらないで書こう

.....

230

3 自分の体験から生まれた言葉で

.....

241

4 口惜しさを読者に追体験させよう

.....

252

労働者の文化とは	273
上野英信の本三冊	275
1 旧炭坑夫の移民——『出ニッポン記』	275
2 『追われゆく坑夫たち』	282
3 肉弾三勇士を生んだ底流をさぐる——『天皇陛下萬歳』	286
出版記念会の夜	290
あとがき	294
初稿掲載誌紙一覧	296

I



# 庶民資料と新しい記録文学

—— 記録文学の発掘の視座

## 暗いどん底の記録集

新人物往来社から「近代民衆の記録」五巻が出ることになった。

さきに三一書房から出た「日本庶民生活史料集成」は、わたしのように近世の民衆生活を知りたいとねがっているものには、ショックングといつてもいいほどの出版だった。わたしに似たような感情をもった人が少くなかったと見えて、一冊九千円で十巻という高価にもかかわらず、相当多い購買者を獲得したらしい。そして明治維新以後の史料までを含む十巻が増刊されたが、この分の売行もたいして減っていないようである。それほど庶民生活の史料にわたしたちは飢えていたといつていいだろう。そこには、支配権力争奪に憂身をやつす武士の政治世界やそれについて消長する朱子学・陽明学・国学等の思想界やほとんど遊里を謳ってきた戯作世界とちがっている世界がひろがっている。わたしたちのなじみの人物や事件も見えないではないけれども、やはりもっと貧困で息苦しい生活、あまりきれいごとではない生活絵巻がくりひろげられているのである。もっともすべての史料がしっかりしたデッサンで描かれているとはいいがたいどころか、

その反対であるにしても、ともかくほこりつぱく汗くさく怨念とあきらめとの綯いませられた庶民の生のおいが立ちのぼっているのである。

『日本庶民生活史料集成』は増巻の一部に明治初年の史料が収録されることになったけれども、それで腹がくちくなるほどは入っていない。明治以後の庶民生活史料は、いくらでもありそうである。筑摩書房はかつて『世界ノン・フィクション全集』（五十巻）を出してその半ばを日本の記録文学をもってみたしたが、一番残念だったのは全文の再刻ではなくて抜粋だったことである。さらに目下『現代日本記録全集』（二十四巻）が完成しようとしているが、これもエッセンスを集めたもので、それなりに読んでおもしろいのには、あまり多く売れていないらしいのは、どうしてだろう。もっと基礎的な史料としては『生活古典叢書』（八巻・光生館）がゆっくり刊行中である。ここには『職工事情』『明治前期日本の下層社会』『女工と結核』等、官庁や民間有志による統計調査報告が収められている。明治、大正社会のもっとも底に圧しつけられて社会発展の踏み台にされていた階層の生活の実態を、冷たい数字や調査資料を並べることによって、かえって正確に伝えているといえよう。だから明治大正の社会を知ろうと欲するものには、どうしても避けて通ることのできぬ記録ということになろう。

今度刊行される『近代民衆の記録』は、今挙げたような記録集成の中でも、もっとも暗いどん底の記録集といえよう。その五巻がそれぞれ農民、鉦夫、娼婦、流民、アイヌと題せられているところから想像されるとおり、日本近代の市民社会から転落し、疎外され、差別され、迫害され

た分子の生活を追跡している。『職工事情』よりも一段とどろどろとして前近代的で、今まで深く隠されてきた近代日本の恥部に触れているといつてよからう。わたしはそこに収められた資料のリストを一瞥したけれども、わたしの読んだことのあるものは数種にすぎなかった。わたしは、本の蒐集も読書も範囲はかなり広いつもりだし、とくに記録文学には注意をおこたらないできたつもりだが、そうなのであった。『日本庶民生活史料集成』では、名前は高いが、内容を見る機会のなかった書目が大部分だったけれども、『近代民衆の記録』においては、名前さえ初耳という資料がたくさん並んでいるのに、おどろいた。まだ実物を見ていないが、たのしみなことである。

### 記録文学の要素

記録がすべて文学だというわけではない。昔から庄屋の帳面とか、土地の譲り渡し状とか、公卿その他の日記とか、彪大な記録があつて、歴史の資料として貴重なものである。近代に入つてからは、官庁や会社の報告・統計の類はめちやくちやくにたくさんある。これらも専門の研究者にとって重要な研究材料になりうるかもしれない。がしかし文学のたのしみとは縁どおい。

しかしそういう紙屑の山でしかない記録の中にも執筆者の深い感慨がもりこまれていたり、見方の鋭さで人生や社会をみごとに截断していたりしている部分がまじつていて、それじしん文学的な興味をよびますものがまじつていないではない。日記とか手紙とかにおいて、しばしば、そういう要素が光っているのを見つけることが多い。たとえば宮中の有職故実や儀礼のことを記録している平安朝の公卿の漢文日記などで、ときたま当人の怒りや悲しみを洩らした二、三字が

挿入されていると、生きた人に出会ったような感動をおぼえることがある。定家の『明月記』ともなれば、ずいぶん興味深いものになってくる。手紙なども本来は用件を伝えるためのもの、つまり実用を旨としているのだが、人間どうしのコミュニケーションだからつい何かのはずみに感情を吐露してしまい、怒ったり哀訴したりするところに、人生の相が浮かびあがってくることかめずらしくない。さいきん、べつの必要から吉田松陰を読んだが、その中でも牢内から門人たちに送った手紙は、ヒステリーになって叱りつけたり絶交したり怒り狂ったりするさま、かれの尊王攘夷論に賛成反対はべつとして、すこぶる壯観であった。近代ともなれば、きわめておもしろい書簡集を残した文学者がかなりいるけれども、徳川時代ではもっともおもしろい手紙であろう。探検記、旅行記は、記録文学の中で、興味の点からいってもっとも大きな部類に属するだろう。明治以後に限ってながめても、河口慧海『西藏旅行記』のような傑作があり、鈴木経勲『南洋探検実記』、福島安正『伯林より東京へ、単騎遠征』、白瀬晶『南極探検』等、それぞれ危険にみちた異境に立入って、それまでの日本人が見聞したことのない新奇な世界をひらくとともに、冒険のためについやされる精神と肉体との緊張とエネルギーに読者は、多かれ少かれ、打たれずにはすまぬのである。江戸時代には、国内でも奥羽のはてや九州のはてに旅行することは、冒険であり探検であったが、近代ともなれば、やはり世界の辺境地域まで歩かねば探検にならなくなった。もちろん、旅行記もまた、記録文学のたのしい一類であり、しらべてみたら、明治維新以後、明治年代だけで欧米旅行記が数十種も発行されているのにはいささかおどろかされた。日本に西欧文明を輸入するために、かなりのひとびとが洋行した。といっても、その数は、えらばれた人

士に限られている。その人々は日本の将来をになって西洋から帰ってきたのであろう。だから洋行帰りは、自分の目で見た先進国のありさまを若干の驚異とかかなりの自慢とをもって語らずにはいられなかったようである。しかしご当人が自慢するほど、聞き手にはおもしろくないのも、またやむをえないことだろう。欧米を見物してまわれれば、はじめての洋行者には、ものめずらしさがいっぱいであろうが、しかしめずらしさと心の底からの驚異とは異質なものであり、まして文明国では、詐欺やかたりに出会うおそれはあっても、チベットに潜入するような全身的な冒険をする必要がなく、したがってとかく精神までだれてしまいがちなのである。そういう弛緩した精神が読者に何らかの緊張をあたえうるはずがない。軽薄な洋行者の旅記の大部分が、ひまつぶしがせいぜいであるのは当然ではあるまいか。

明治十一年に太政官記録係から出版された『特命全権大使米欧回覧実記』を記録文学の代表作として推すひとがあつたので、わたしも目を通した。明治四年十一月から同六年九月まで一年十ヵ月にわたって欧米を回覧してきた岩倉具視・大久保利通等欧米特命全権大使一行の旅記といえ、だれでも耳をそばだてて聞いてみたくなるにちがいない。条約改正交渉のために、出来たてはやはやの明治新政府の最高実力者がそろって洋行する。それも太平洋を渡って米国にしばらくとどまったのち、大西洋を経て、イギリス、スコットランドを回り、フランス、ベルギー、オランダ、プロシア、ロシア、ノルウェー、スウェーデンの奥を歩き、さらに引返してオーストリア、スイスを見物、マルセーユから船に乗って、紅海、インド洋を航海して帰国した世界一周旅行。しかもその留守中に国内では征韓論が沸騰していたのに、一行は、帰朝するや、その政策を

叩きつぶして、政府重職の半分を辞職させるといふような大事件をひきおこすのである。ところがこの『回覧実記』をひもといてみると、肝心の条約改正交渉の失敗については一行もふれられておらず、また、国内の政情などもぜんぜん無視されている。それどころか、大使一行が何を考え、何をしたかも書いてない。ただ途中で見物した地理・風俗・博覧会等について詳しく述べてあるが、それらは黄色に古ぼけた絵ハガキみたいにくすんでいるだけで、わたしの内部の何ものをも触発しない。延々千ページ以上にわたってつづくこういう生命の緊張のない記述ほど味気ないものはない。もっとも外交、政治については別に報告があるから、ここでは省略することわってある。とはいふものの、せめて大使一行も人間の集団であつたから、旅の途中でさまざまな失敗やら互の感情的軋轢やら不安やら、あるいは欧米の新文明にはじめて接する驚異やら、人間的感情が流れていたに相違ない。そういうものが多少とも記述されていたら、実記と呼ぶに値しようが、現在ある形では、単なる欧米の紹介の域を脱していない。あるいはこういう味気なさが洋行の土産話の一ばんの好見本なのかもしれない。

### 蘇生できる死んだ記録

ところで、まったくのそっけない記録でも、読みかたによって別の光彩を帯びることがある。さきにふれた『職工事情』は官庁の報告書であつて、その付録に収められた女工虐待の実例は凄惨目をおおわしめるほどのリアリティをもつて報告されていて、明治、大正の記録文学の傑作の一つといえようが、それ以外の一般的な報告も、じっくり読んでいくにつれて、悲惨な紡績女工の

世界がありありとひろげられてゆくのおぼえる。まず職工の年齢を見ると、

十一年以上ト定メタル処ニシテ各年齢以下ノ職工ヲ傭使セルモノ

男 女

摂津 一七四人 二二七人

渡辺 四 四 (以下省略)

というような統計が出ている。ややこしいいかただが、要するに十歳以下の子供を職工として働かせている数なのである。ずいぶんひどいことをするもんだなあとおもわぬわけにはいくまい。労働時間、徹夜業による体重の減少、雇傭契約の雛型、賃銀、数字を読んでもみると、どれも非人間的な待遇である。また賞罰について調査官と職工との問答が載っている。「七八歳ノ幼年工ノ仕事ハ昼ダケカ夜モカ」「夜モシヤ、昼ハ役人ガ喧シイカラ掃除スル。夜ハユルイカラ掃除ヲ怠ル。冬ハ自分等始終単衣一枚シヤ」「一処ニ夜業スルカ」「スルケレド菓子ヲクレネバ行カヌト云ウ事モアル……」「工場デ寝ヌカ」「眠レバ叱ラレル段タカレル」「給金ハクレルカ」「八銭クレル、食料七銭ヲ取ラレルユエ一銭残ル」等々。さらに工場寄宿舎の献立表で、一年じゅう朝は香の物だけ、昼は唐菜漬、晩は高野豆腐というのを見れば、いかに栄養劣悪であるか、身にしみてわかろう。こういう調査報告や数字をながめるだけで搾取ということがまざまざと浮かんでくるではないか。